

## 電柱は景観阻害する“余計な存在” まちを誇りに思う気持ちで原動力に



天野 光一

AMANO Koichi

日本大学理工学部まちづくり工学科教授

2020年東京オリンピック開催や切迫する巨大地震への備え等から、景観や防災に配慮したまちづくりが求められている。そのため、海外の主要都市では当たり前の「無電柱化」が注目されているが、我が国では、一部の大規模商業地域や幹線道路以外に普及していない。電柱や電線のない道路空間を日本でも常識にするためにはどうすべきか、無電柱化の現状と課題を、都市景観を研究する天野光一・日本大学教授と各地の無電柱化を支援するNPO法人の井上利一事務局長に語ってもらった。

司会は、国土交通省道路局環境安全課の小澤盛生・課長補佐。

——電柱を路上からなくすことによって道路の防災性向上や安全で快適な通行空間の確保、良好な景観形成等、様々な効果が期待できます。本日は、全国各地の無電柱化の取り組みをご覧になっている二人の専門家をお迎えし、「無電柱化」という切り口で、日本が目指すべきまちづくりについて考えてみたいと思います。

まちづくりを進める上で一番大切なことは何だとお考えですか。まず、その辺りからお願いします。

天野 国民にとって最も身近な「公共空間」は、道路

1955年、東京都出身。東京大学土木工学科卒業、同大学院土木工学専攻修士課程を修了し、1980年、建設省土木研究所入所。フランスに1年間研修後、東京大学大学院助教授、フィリピン大学客員教授等を歴任し、2001年、日本大学理工学部教授。博士（工学）。専門は景観工学、観光計画。

## 電柱の存在当然視する日本の現実 変革は、美しい街並みの体験から

井上 利一

INOUE Toshikazu

NPO法人・電線のない街づくり支援ネットワーク  
理事兼事務局長



です。なぜなら、広場や公園は利用しない人でも、道路をまったく利用しないということはないからです。その意味では、道路を豊かな空間にすることが、豊かなまちづくりに直結するといってもいいでしょう。

ところで、「公共」というと、日本ではすぐ役所と思いがちですが、欧米では「公・共」で、役所の「公」と、共同または共有を意味する「共」が結び付いた概念です。そのため、公共空間としての道路では、役所が整備する歩道や車道だけでなく、それと一体となって景観を形成する沿道の建物や田圃等も、重要な要素になります。

この「公・共」の件は、約30年前、フランスへ研修に行く私に、景観工学の大先輩から伝授して頂いたものです。当時20代の私は半信半疑でしたが、パリの目抜き通りから田舎のちょっとした通りに至るまで、個人の建物は厳しい規制がかかり、貼り紙はだめ、電柱なんかとんでもないというのが、向こうの現実でした。

そこにあるのは、「豊かな公共空間をつくるためには、『公』だけが頑張っても無理。周りの人々や訪れる人々を含め、『共』の力が必要」という考え方です。まちづくりの基本は、「公」と「共」の協働というわけです。

井上 同感です。私の経験でも、地域のやる気がまちづくりのカギを握っている印象がありますね。

すなわち、「自分のまちをよくしよう」という住民の思いが強いところは成果が出ているのに対し、「あれを欲しい」、「これも欲しい」というように、行政に要望す

1966年、福岡県出身。1990年に立命館大学文学部を卒業し、出版社、広告代理店勤務等を経て、2007年、NPO法人・電線のない街づくり支援ネットワークの設立に参加。2013年、立命館大学大学院政策科学研究科修了。一級土木施工管理技士。電線類地中化推進のセミナー等を開催する。

るだけのところは、あまりうまくいっていないようです。

天野 海外でも、自分のまちを誇りに思う気持ちがまちづくりの原動力になっています。ところが、日本では、往々にして、「家」に住んでいるだけで「まち」に住んでいるとは言い難いようなケースがあります。

まちが好きになると、知らない人とでも挨拶を交わしますし、訪ねてきた友人に「私のまちはここがお勧め」と自慢したくなります。そのためにみんなが努力しますから、まちはだんだん美しくなっていくわけです。

これに対し、勤め帰りの人が、最寄り駅から一目散に自宅を目指すようなまちでは、途中でだれかに挨拶する必要はありません。自分のまちという感覚はないので、まちを良くしようという気持ちも起こりません。

残念ながら、近頃は、後者が増えている気がします。まちを変えるのが先か、それとも住民の意識を変えるのが先か。鶏と卵ですが、「住んでいる実感のあるまち」をつくること。これが第一歩ではないでしょうか。

井上 まちづくりで住民の方とお話するとき、私がよく引用するのは、「割れ窓理論」です。これは、軽微な犯罪を徹底的に取り締まることで、凶悪犯罪を含む犯罪全般を抑止できるという環境犯罪学の理論です。

かつてのニューヨークは、地下鉄の落書きがひどく、犯罪が多発し、治安が最悪でした。ところが、1994年に就任した市長が、割れ窓理論に従って、落書き等の取り締まりを強化したところ、5年間で殺人や強盗等が半分に激減する等、治安が大幅に回復しました。

アメリカの例をもとにすれば、まちが汚いごみをポイ捨てする人が集まり、ごみだらけになる。逆に、綺麗になると人々の意識が変わり、見違えるほど良くなります。「ごちゃごちゃした電柱や電線をなくせば、まちは見違えるほど良くなります」と説明しています。

まちづくりのカギ

天野 地域の風土に根差した自慢のネタを見つけること

井上 商店街のアーケード撤去が無電柱化への扉を開けた

——住民の意識と、住民が自慢できるような魅力的なまちをつくること。この二つが欠かせないという指摘ですね。では、人々が誇りを感じながらまちづくりを繰り広げている事例があればご紹介頂けませんか。

井上 たくさんありますよ。明智光秀が築いた城下町として知られる京都府北部の福知山市もその一つです。市

中心部にある商店街のみなさんは、福知山のまちが大好きです。近年、少し寂れてきたため、「現状を何とかしたいが、自分たちの実力では埒が明かない」と相談があり、私たちが無電柱化のお手伝いをしています。

全員揃って、花を植えたり、店舗のファサードを綺麗にしたり、まちを盛り上げようとお祭りをしたり。お蔭で、観光客も徐々に戻り、活気が始まっています。

天野 2007年の土木学会デザイン賞の最優秀賞に輝いた山形県金山町を、受賞前に選考委員長として訪れたときの体験は、いまでも記憶に残っています。特産の杉と在来工法を使用し、長い歳月をかけて整備した「金山型住宅」が並ぶ景観の美しさもさることながら、それ以上に驚いたのは、地元小学生の立ち居振る舞いでした。

下校途中、私たちとすれ違くと、全員が元気いっぱい「こんにちわ」と声を掛けてきました。まずこれに感動です。道路沿いの水路に引掛かったビニール袋を、傘の柄を使って一生懸命に回収しています。どうするか見ていると、自宅へ持ち帰って捨てるといいます。

だれの強制でもないし、大人が見ているからそうするわけでもありません。挨拶もごみ拾いも、まちが綺麗になっていく中で自然に身に付いた行動です。まちづくりとは本来、こういうものではないでしょうか。

——福知山や金山のケースでは、何が、人々の意識を大きく変えるきっかけになったのでしょうか。

天野 金山町では、元々、地場材の杉を使う建築様式とまち並みを大切にしている素地がありました。地域が衰退し、建築家が現地に入り始めると、町もやる気になり、町民も、次に自宅を改築するときはお金が少し掛かっても在来工法でという意識が醸成されていきました。

要するに、地域の風土や歴史、文化に根差した「自慢できるネタ」が見つかったことが奏功しました。ネタはちょっとしたことで構いませんし、お金があまりなくても、少しずつ、地道に続けていけば十分です。小さな力でも東になれば何とかなるわけですからね。

井上 福知山で大きかったのは、長さ約300mの商店街のアーケードをなくしたことです。当初は「雨が降ったとき困る」、「建物が丸見えになる」等、大部分が反対でしたが、当NPO法人の理事長が合意形成を図った結果、国の補助金が付き、2012年夏に撤去しました。

みんなの意識が変わったのはそれからです。すっきりとして、商店街の良いところも悪いところも全部見えるようになると、「ここを活かして、あそこを変えよう」とまちづくりに積極的に参加する人が増えてきました。

その中で、「電柱が目立つ」、「電線が煩わしい」等の

声が高まり、2013年度に無電柱化の実施が決まりました。いよいよ2015年度に実施設計が行われます。

——まちづくりを進める上で、専門家の役割を教えてください。

天野 いまは海外旅行が普通で、みなさんヨーロッパに出掛けて行きますから、まちづくりが日本と違うことはよくご存じです。しかし、向こうをお手本にしようとしても、方法がわからずお手上げという場合も結構あります。そうすると、専門家の出番です。

商店街のアーケードを例に挙げると、井上さんのお話のように撤去するケースもあれば、残すという選択肢もあるでしょう。ただし、まち歩きや買い物を楽しむ人が「主役」で、アーケードは「背景」に過ぎませんから、残す場合でも、どういうデザインにするか等は、専門家の知恵を借りた方が賢明だと思います。

井上 地方へ行くと、建物でも自然でも、すごく良いものがあるのに、地元の人は普段から見慣れているせいで無関心だったり、「大したものじゃない」とぞんざいに扱ったりする光景を目にすることがあります。

そんなとき、専門家が、第三者の立場から客観的に見ることで、「これは大変素晴らしい」と教えてあげたり、「多くの観光客に来てもらうためにはこの辺りをもっと盛り上げたらどうか」等と提案してみたり。その結果、新しい展開が拓けることも珍しくありません。

アーケードの撤去が無電柱化への扉を開いた福知山の商店街のケースは、典型的な例といえるでしょう。

このように、住民が地域の資源の価値を見直す「気付き」の提供も、専門家の仕事ではないでしょうか。

専門家の役割	
天野	事業成果こまめに見せる努力 横断架空線撤去へ…三保松原
井上	祇園祭…往年のルート復活へ 無電柱化巡る誤解払拭で貢献

天野 もう一つ、まちづくりでは、役所も市民のみなさんも、それなりの方向性やビジョンのようなものをお持ちですが、いつも高邁な理想を振りかざすだけでは疲れてしまいます。目標をきちんと押さえておくことは必要ですが、長丁場になりますから、取り組みの成果をこまめに見せてあげることも、専門家の仕事です。

例えば、2、3年後どうなるかが見えてくると、「少し我慢したらこんなによくなる。それなら、もうちょっとやってみるか」と元気が湧いてくるものです。

世界文化遺産・富士山の構成資産の景観改善に向け、静岡県富士宮市の「白糸の滝」や静岡市の「三保松原」周辺地域では、電柱や電線類を撤去する計画が進行しており、私もそのための検討作業に関わっています。

このうち三保松原については、都市計画道路（県道）の拡幅に合わせて電柱の地中化を行います。工事が終わるまでには長い時間がかかる見込みです。さすがに、「そこまで待てない」と、約1.4kmの間、道路を横切る形で富士山の眺望を阻害している電線類112本を、2015年度からの2年間で撤去することになりました。

もっとも、電柱の方は元のままですが、横断架空線を撤去する狙いは、「即効的な対策」による事業効果の早期発現です。なぜなら、「横断線を少し取り除いただけでも景観がこんなに良くなる」と多くの市民が実感すれば、それが追い風となり、予定していたほど長い歳月をかけなくても、無電柱化が実現するかもしれないからです。



三保松原の現況(上)と、横断架空線撤去後イメージ(CG)(下)

井上 今年7月の京都・祇園祭では、49年ぶりに復活した「後祭」で、無電柱化が話題に上りました。高さ25m前後ある山鉦巡行は、往年の「三条通」が電線類に邪魔されて通ることができなかったため、例年と同様、電柱のない目抜き通りで行われました。

そのため、「昔と同じ三条通での巡行」を希望するみな



京都市の「祇園祭」

さんから、無電柱化の相談を受け、先日、住民や商店街の方と勉強会を開いたところ、①道路が狭いため工事ができない、②膨大な費用がかかる上、自己負担がある、等の理由で迷っている人が多いことがわかりました。

ほとんどが間違った情報に基づく誤解で、その辺り一つひとつ、丁寧に説明した結果、最後は、「無電柱化は不可能と思っていたが、話をうかがい、やればできるとわかった。何とか実現したいので手伝ってほしい」と頼まれ、協力していくことになりました。

無電柱化は、我が国ではまだ実施例が多くないため、恐らく、端から無理と諦めているケースが少なくないと思われま。人々の誤解を解き、正しい認識を普及していくことも、私たちの役割であると考えています。

天野 これからのまちづくりは、国が雛型をつくって押し付けるのではなく、自治体と住民が中心となり、国が後押しするやり方に改めるべきです。そのためには、まちづくりについて様々なことを学び、市町村の取り組みを支援する技術者を養成する必要があります。

私の大学のPRになりますが、日本大学理工学部が2013年度に「まちづくり工学科」を創設したのも、こうしたニーズに応える狙いがあります。学生数は1学年100人と、学部では一番小さな学科ですが、毎年、3分の1ぐらいの学生が各地の市役所に就職すれば、将来、まちづくりの大きな戦力になると期待しています。

——日本は1986年以降、6期の計画を策定し無電柱化を進めてきましたが、海外の主要都市に大きく遅れをとっています。国民の意識については、どのようにお考えですか。

井上 約2年前、京都の大学で3回にわたり、約100人の学生の前で無電柱化の話をする機会があり、電柱はあった方がいいか、ない方がいいか、アンケートをとりました。予想に反して、結果は半々となり、愕然としました。理由は、「いつもあるから」、「いまあるものをわ

ざわざなくさなくてもいい」というのです。

そこで、2回目に無電柱化のメリットとデメリットを説明した上、最後に再調査したところ、今度は、8対2で、ない方がいいが大勢を占め、ほっとしました。

とはいえ、多くの国民が「電柱は当たり前の存在」と受け止め、特に若い人ほどその傾向が強い事実が明らかになった意味は大きいと思います。この意識をなんとかしない限り、日本の電柱はなくなりません。大きな危機感を覚えるとともに、こちらも、本腰を入れて取り組まないといけないと覚悟を新たにされた出来事でした。

天野 汚いけれど見慣れているからそれでいいというのは明らかに変です。ない方がいいものはない方がいいという当然の考え方が、当たり前にならないと。

それには、電柱がなくなったらこんなに景観が良くなるということをきちんと教える必要があります。最近ならコンピュータグラフィックス(CG)技術を活用し、視覚的に見せてあげるのが効果的だと思いますよ。

ところで、無電柱化に関連し、景観と料理には共通点が多いという話を、私はよく学生にします。

料理は、味がまずくてもお腹がいっぱいになればいいというのはだめ、少しでもおいしいものを食べたいと思うことが大事です。その次のステップは、ちょっと勉強して、どこのレストランのどんなメニューがいいとか、食材はどうか等、<sup>うんちく</sup> 藁薈を傾けること。仕上げは、板前としておいしい料理をつくってみせることです。

景観の場合も、まずは、少しでも美しいものを見たいと思うのが基本。いかにおいしい料理を食べてもらうかはありませんが、プロとして、良い空間を味わって頂き、空間の良し悪しに気付いてもらう。その次は、なぜ良いか、悪いか、理由を教えることです。

料理に喩えると、わかりやすいと思います。きちんと説明すれば理解して頂けるのではないのでしょうか。

事業の円滑な推進に必要なこと	
井上	最初に住民の合意形成 低コスト手法の検討も
天野	道路空間の質向上に協力 役所と住民は“共同体”で

——無電柱化をスムーズに進めるためには、住民の合意形成が重要です。地域の協力関係を築く場合のポイントを教えてください。

井上 無電柱化の工事が始まると、交通規制や民有地の利用等、いろんな問題が起き、総論賛成・各論反対が

起きます。そこで、事業実施を決めたら、最初の時点で、住民全員の合意形成を図り、「自分たちが主体でやります」という姿勢を示すことが重要です。

2006年度からの4年間で約630mが整備された京都・清水寺周辺の「産寧坂地区」は、幅員が3m程度で古い町家が道路際に建っているため、スペースがなく、トランスを路上に設置しました。これまであまり採用されていない方法ですが、行政や電力会社を、無電柱化を目指す住民の強い意思が後押ししたと聞いています。



京都市の「産寧坂」

埼玉県川越市の「蔵造りの町並み」(約430m)も歩道のない車道です。地上機器は、商店前にカモフラージュしたり、民間の敷地の中に置いたりしています。



川越市の「蔵造りの町並み」

天野 無電柱化には、裏配線や軒下配線という手法もあります。いずれも地域の協力が大前提となりますが、住民のみなさんや関係機関が知恵を結集すれば、できないことはないと思います。

——行政に対する要望はございますか。

天野 事業自体が目的化するようでは、住民に理解してもらえないでしょう。要は、役所が、「みなさんの道路空間の質を高めるため協力させていただきます。一緒にやりましょう」というスタンスに立つことができるかどうかです。



左から天野氏、小澤氏、井上氏

住民とともに、道路空間を良くする“共同体”としてやっていくことが求められているといえるでしょう。

井上 無電柱化は事例がそれほどないため、私たちが役所に要望してもなかなか動いてくれなかったり、特に地方に行くと、「前例がない」等と言われて、空振りに終わったりすることもしばしばあります。これからはある程度勉強して頂くことも必要ではないかと思います。

——締め括りに、無電柱化を進めていくため、国民や行政関係者等にメッセージを頂ければと思います。

天野 まちの景観は、銀座の中央通りや丸の内のおフィス街のように、すべてが整然としている必要はありません。裏道に入ると、赤提灯が下がっていたり屋台のテーブルが歩道にはみ出していたり、多少散らかっている方がほっとできて、居心地が良いと思います。ただし、それを保証してくれるのは電柱ではありません。電柱は邪魔なだけの余計な存在といってもいいでしょう。

では、どうしたらいいか。本日はいろんなことを申し上げましたが、先例をもとに知恵とノウハウを共有することです。ただし、難しい報告書はだれも読みません。電柱がないとこんなに良くなるのが小学生でもわかるような事例集をつくってみるのもいいでしょう。

井上 二点あります。一つは、先ほどの大学生のアンケートのインパクトが大きかったものですから、将来、手遅れにならないよう、小中学生の頃から、まちづくりに関する教育や、美しいまち並みにじかに触れる体験を充実させていかなければいけないと考えています。

もう一つは、無電柱化の技術に関することです。現行の電線共同溝もそうですが、日本では、非常にスペースの高いもので整備が行われています。幹線道路等はそれでいいとしても、住宅地や大型車が通らないようなところは、埋設の深さを思い切って浅くしたり、パイプ等の機材をより安価なものに変更したりする等、コスト削減を図ることも必要ではないのでしょうか。